

本論文は、史上「背教者」と形容されるローマ皇帝ユリアヌス(西暦363年、33歳で没)が実施した宗教復興の思想と帰結をめぐって、これを近年の歴史学の成果である「古代末期論」の文脈に位置づけ、思想的には新プラトン主義者からの人格的影響を深く考察することによって、ユリアヌスという人物の宗教観・世界観の全体像を宗教史的脈絡の中で解明しようとしたもので、全6章で構成され、巻末に文献目録と年表を付す。

著者は第1章において、西欧がいかにユリアヌスを受容してきたかを歴史的に回顧し、先行研究を包括的に検討した結果、キリスト教に代わるべき宗教の導入を意図したとする有力な学説がユリアヌス自身のキリスト教理解を等閑視している点を批判する。さらに、同時代の資料が現実の民族宗教に対するユリアヌスの無理解に言及する点に着目し、ユリアヌスの側になんらかの強固な思想があったことを想定する。著者はこれらを根拠として、ユリアヌスの宗教観の全体像を解明する必要性を指摘し、本論文の課題を明示した。

第2章では、ユリアヌスが成長の過程で、ある種の宗教的原体験を通してイアンブリコス派の新プラトン主義に心酔し、「至高神」への魂の回帰を目指す<真の愛智>の理念が形成されたことが指摘される。それを受けて、第3章では、伝統宗教の復興と誤解されたユリアヌスの祭儀観の特徴を検討し、<真の愛智>によってヘレニズムの伝統宗教儀礼を再解釈するイアンブリコスの枠組を受容して各民族宗教の存在を肯定しつつギリシア的ポリスの祭祀方式に独自の価値を与えた点に、彼の宗教政策の方向性を読み取る。

こうしてユリアヌスの理想主義的宗教観を整理した後、現状に対する具体的な施策の分析が展開される。第4章では、彼が理想とする祭儀の場とその指導者をめぐって、都市共同体における神官・教師・医師を尊重する理想主義的な「パイデア」的教育内容が分析される。第5章では、彼がキリスト教を、妬む神を信仰し貧しき反逆者イエスを模倣する悪しき宗教とみなし、殉教者崇拝を屍体崇拝として忌避し、キュニコス派とともに<悪しき愛智>として批判したことを論証する。第6章では、具体的な施策が帝国の東方諸都市で実施された有様とその帰結が詳述され、ユリアヌスが、キリスト教に冒されたギリシア的ポリスを<真の愛智>によって復興させるべく、自ら率先して哲人祭司王的神官としての範を示し、当時の一般大衆の祭儀観を顧みずに理想を实践する姿が浮き彫りになる。

本論文は、研究対象を網羅的包括的に再構成することに力点が置かれた結果、具体的施策における歴史的事実に基づいた歴史学的議論が不足している点や、古代ギリシア・ローマ宗教史を背景とする伝統宗教の供犠と神観念について、定義の曖昧さや具体的事例の分析が不十分である点などが認められるものの、ユリアヌスの理想主義的宗教観の全体像を描き出して一定の人物像を提示しえた本論文は、この分野における重要な貢献であり、本委員会は本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。